



ジャーナリスト 草野満代さんに BangladeshにおけるODA事業を 視察していただきました。

草野 満代さん

津田塾大学学芸学部数学科卒業後、1989年に日本放送協会入局。金沢放送局赴任を経て、東京アナウンス室転属。「NHKモーニングワイド」キャスター、「紅白歌合戦」総司会等を務める。1997年10月、TBS「筑紫哲也NEWS23」キャスターに抜擢され、9年間にわたり同番組に出演。著書にエッセイ集「ニュースキャスターの本音」(小学館)がある。

視察事業

配電網拡充および効率化事業(円借款)	農村電化組合における配電網新設により農村の電化を目指す事業。ムンシガンジ県農村電化組合を訪問し、電化の恩恵を受けた農産物冷蔵貯蔵施設、村落企業(織物製造販売)等を視察。
大ファリドプール圏農村インフラ整備事業(円借款) 大ファリドプール参加型農村開発行政支援(JICA技術協力)	貧困地域である大ファリドプール圏にて、農民参加による農村インフラ整備を通じ貧困削減を目指す事業。技術協力で住民の参加を促進。シャリアットプール県にて、地方道路、橋梁、村落市場、住民による道路維持管理作業現場を視察、村落評議会に参加。
農村開発信用事業(グラミン銀行)(円借款)	無担保にて少額融資を行い、土地なし貧困層の生活水準改善、女性の地位向上を図る事業。教育ローン受益者、夫と別れた後に牛を飼育して土地所有者となった女性、パン工場、養鶏場等を視察。
ジャムナ多目的橋建設事業(円借款)	ジャムナ橋建設を通じ、東西経済格差の是正を図り経済発展を目指す事業。ジャムナ橋を渡り、インフラの重要性を実感。

「努力すれば生活は変えられる！」

女性の意識が変わっていく

——お仕事柄、今までいろいろな国をご訪問されたと思いますが、Bangladeshを訪ねられての率直な印象からお聞かせください。

草野 まずは「Bangladeshで開発と援助に携わっているすべての皆さんに、心からの敬意を表したい」そんな気持ちです。実際、私が今まで訪ねた外国のなかでは、間違いなく最も貧しく過酷な環境の国でした。貧困、頻発する洪水、人口増など、何から手をつけたらいいのか考えもつかない、というくらい多くの問題が、重層的に、しかも根深く存在する困難な状況のなかで、問題をひとつひとつ解決し、乗り越えていく根気には頭が下がる思いです。一方、日本と比べてはるかに厳しい環境のなか、強く逞しく生きているBangladeshの人々には、幸せ



大ファリドプール圏農村インフラ整備事業にて村落道路の維持管理を行う女性労働者

の意味について考えさせられ、むしろ私の方が元気をもらったような気がしています。

——視察にあたって、特に女性の受益者と触れ合って話が聞きたい、とおっしゃっていましたが…。

草野 農民参加によるインフラ整備が行われた大ファリドプール農村の女性は、以前は、家から外に出ること自体が「恐ろしかった」と言っていました。女性の地位が低く、家にいるのが当たり前とされていた国ですから。それが今は、女性も集会に参加して、「トイレを作ってほしい」「家畜にワクチンを打ってほしい」というさまざまな要望を出して、それを実現させているんです。どうせ言っても無理だ、誰もな



混雑するダッカ市内



子牛を売って土地を購入し
土地所有者となった女性と共に



農民が営むパン工場

にもしてくれないと今までは諦めていたけれど、声を出してそれに向かって努力すれば、ひとつずつ問題が解決して自分たちで生活を変えていけるのだという希望を、現地の女性たちが共有し始めているということ、それがすごく感動的でした。

——草野さんが帰国なさった直後、今回視察対象の円借款事業のひとつであるグラミン銀行と総裁のムハマド・ユヌス氏に対して、ノーベル平和賞の授与が決定しましたが、実際に視察されての印象はいかがでしたか。

草野 設立当初は、無担保で融資するというシステム自体、信じられなかったと思います。たとえば、ご主人と別れた後、グラミン銀行で2000タカ（日本円にして約3500円）を借りて、牛を2〜3頭買った女性の話では、やがて牛が子牛を産み、子牛を売ったお金で土地を買い、農作物を作って収入も増えたそうです。また農業に加え、パン工場を経営している農民にも会いました。融資と返済を繰り返しながら、事業経営の意識が芽生え始め、人々の活力を生んでいること、また女性が借金の名義人になるということで、確実に女性の地位や立場が向上しているのだということを実感しました。

実際の貢献に もっと見合うアピールを

——円借款事業の印象はいかがでしたか。また支援を成功させるためには、どんなことが必要とお考えでしょうか。

草野 ハードだけでなく、農民のエンパワーメントなどソフト面も組み合わせた支援の重要性がよくわかりました。そして何よりも、人と人が関わって、ひとつひとつ合意に至り、一歩ずつ進んでいくプロセスこそ重要だと感じました。援助

される側のニーズをふまえたうえで、日本の援助の精神をきちんと理解してもらって、共に歩もうというモチベーションも盛り上げていかなければならない。ある時は非常に厳しい目をもって臨むことも必要でしょうし、またある時は勇気づけたりとか…。それは人びとの努力によってしか実現できないものです。物質的な援助だけでは絶対に問題を解決できないですから。

——今後の日本のODAはどうあるべきだと思いますか。

草野 あらゆる意味であきらめてはいけないし、消極的にならないでほしいと思います。日本のODAがこんなにも役に立っているのだというアピールも、もう少しあってもいいかな、と。そういうことを声高に言うことは、私たち日本人が美德と考える謙虚さ、あるいは美意識に反するかもしれないけれど、実際の貢献に見合う評価を求めてもいいのではないかと思います。「わかってくれる人はわかってくれる」というのでは、わかてもらえません。その辺の主張は、多少うるさがられるくらいに（笑）、上手にしたたかに主張してほしい。そのためには、プロジェクトの意義や成功例だけでなく、プロセスにおける失敗や苦勞話をわかりやすく、実感できるように伝えてもらいたいと思います。

——最後に、日本人の若者へのメッセージをお願いします。

草野 最近の若者は、日本を離れたくないなどの理由で海外への関心が低下しているそうで、憂慮すべきことです。今の日本人には、電気がないという状態を想像すること自体難しいこと。日本人が援助を理解するにはまずそういう状況を想像する力が大事だし、積極的にいろいろな文化、価値観、生活を知り、相手のことを理解しようとする気持ちをお子さんのころから養っていくことが大事だと思います。日本に生まれていることって本当に恵まれたことなんですから。

